

所謂革命事件・天長節事件とその周辺

西尾, 陽太郎

<https://doi.org/10.15017/2329454>

出版情報 : 史淵. 87, pp.105-130, 1962-03-05. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

所謂革命事件・天長節事件とその周辺

西尾陽太郎

一 兩事件の客観的評価

明治三十九年十二月の「革命事件」と四十年十一月の「天長節事件」の内容・経過については紹介済みの事であり、新しく説明を要しない。極端に誇張された表現によつて世人を驚かせ、殊に政府要人に強い刺戟を与え、大逆事件へのフレームアップの一因となつた点などから見れば、この兩事件は我国社会主義史上注目すべき事件であつたに相違ない。しかしこれら兩事件の真相自身はどれ程のものであつたか。恐怖は「忠君愛国」に呪縛された政府要人にとつて大きかつたとしても、それは所謂風声鶴唳のたぐいではなかつたか。「革命事件」の原因となつた文書、「革命」第一号、「カリフォルニア州ニ於ケル日本社会党ノ運動」中、問題となつた箇所は次の如きに過ぎない。「今や貧ナルモノハ怖ルベキ程度ニ於テ増加シツツアリト雖モ富ノ集注ハ『トラスト』ナル制度ニヨリテ絶ヘズ継続セラレタリ。彼ノ資本家ハ屢々労働者ニ對シテ瑣々タル立法ヲナスト雖モ此ノ如キコトハ其利益ナキモノニシテ、其効果恰モ大火ニ向テ小兒ノ水鉄砲ヨリ発スル少量ノ水ヲ注グニ等シキモノナリト信ズ。吾人ノ政策ハナルベク速ニ資本階級ヲ代表セル『ミカド』王 大統領ヲ顛覆スルニ在リ。而テ其手段ニ至リテハ吾人ハ躊躇スル所ナキナリ」(「米國ニ於ケル日本革命党ノ状況」より引用)この事件の渦中に行動した岩佐作太郎の赤羽一宛書状(日刊平民新聞四八・四九号)によれば、十二月二十五日に發生したこの事

件は翌年一月一日には既に鎮静に帰して居り、関係者は一応移民局で訊問されたが何事もなく、五日には同志は桑港で白人社会党员と共に演説会を催しているのである。また「天長節事件」についても、事件直後の四十年十一月四日桑港総領事館事務代理松原一郎より外務大臣宛の報告によつても、「当国ニ於テハ言論出版ノ自由アルヲ奇貨トシ今回前記印刷物ノ配布ヲ見ルニ至レリ尤モ同印刷物ハ未ダ当地ニ於テ外国人及外字新聞紙等ノ注意ヲ惹クニ至ラザルノミナラズ在留邦人モ殆ンド之ヲ知ラズ又タ之ヲ知ルモノモ此ノ徒ノ言論ヲ一笑ニ付シテ全ク齒牙ニ懸ケザル有様ナルニヨリ此際本件ヲ荒立ツルハ寧ロ得策ニアラザル様ニ存セラレ候得共彼等カ右印刷物以外何等外顕行為ニ出サル限り当地ニ於テハ別ニ制裁ノ方ヲ法モ無之カルベク」という程度のものであり、且つ革命党员についても、「此等ノ徒輩ハ……過激ナル空虚空論ヲ喜ブ書生輩ニシテ偶々社会主義又ハ無政府主義ノ一端ヲ聞キ嚙リ前後ノ思慮ナク又何等計画ヲ実行スベキ意志モナクシテ右印刷物ヲ配布シタルナルベク從ツテ未ダ右印刷物発行以外何等ノ外顕行為ニ出デントシツツアリト認ムベキ形勢ヲ発見不致候」とあり、この事はその後四十二年八月三十一日桑港総領事代理永井領事報告にも、「彼等ハ此ノ際兇悪危険ナル特種ノ企画ヲ包蔵シ直ニ之ヲ実行セントスルモノニ非ル如ク只如何ニ其主義ヲ広ク世人ニ宣伝シ如何ニシテ其ノ勢力ヲ扶植シ之ヲ培養センカニ関シ苦心シ居タルモノノ如クニ候」と評価報告されているのである。(社会主義者沿革第二) 両事件の客観的評価はこの点に尽されているといつてよい。しかし一面、何が故にあれ程までの過激な表現を彼等が行つたかという点については、また異つた観点が必要である。この点に関しては例えば社会革命党本部委員の一人、二俣松太郎の同志佐々城佑宛の手紙(前掲「革明党ノ状況」高秘一二号・第二号)の如きがその一端をのぞかせているともいえよう。「世に暴力主義、野蛮主義、本能墮落主義なるものあり社会の然らしむる処、境遇の然らしむる処、罪は主義者に非ずして主義者を作つた社会にあるのだと革命党連始めよく人の云ふ事だが無理もない話だけれども境遇は人の行為を作るべき凡てでなからふと思ふ。……今の世の人無暗に境遇のみをとがめて境遇の奴隷となりたる人心を何故とがめないのである

う。：：僕近頃不平でたまらん：：僕自身がこの矛盾の爲めに苦しめられて居るのだ。」ここに彼の暴力主義への矛盾感と自省が見られるが、更に自己の存在理由について、「人間が其日々々の三度の食事を満足に通して行きながら何を苦しんで何を求めつつあるのであるか、ただ見世物にならんか爲に一層の知恵の実を欲し日夜煩悶しつつあるではないか、人に見られんか爲めに死物狂いに奈落の底に奮進しておるではないか：：奮闘主義然り、精力主義然り、向上主義然り、社会主義然り、君の云う暴力主義は最も純なるもの。僕はここに至りて大いに悲しまざるを得ないのである。世の所謂主義者なるものなぜ三ツ目小僧や両頭蛇となりて生れて来なかつたのであらふか：：」といつてゐる。この手紙の日附は四十年四月二日、革命事件の後、天長節事件の前、排日問題の一段落の頃である。其処には彼等の生活から来る抑圧感への強い反撥、自己表現への欲求、暴力主義への誘惑とその矛盾、敗北主義的悲哀感などがにじみ出ている。それらは多少共社会革命黨員に共通した心理ではなかつたか。そして以上のように考える時、この二事件が日本社会主義史上、結果的に見て注目すべきものとなつたその要因の一つには、明治天皇制絶対主義に呪縛された政府要人の幻想的恐怖感があるわけであるが、また一つにはかかる極端な形で自己表出を行なわしめた社会革命党に対する周辺の問題が顧られなければならない。時期的に見て、明治三十九年から四十年にかけて、彼等の感情を激昂させその思想を過激な表現へと導いたものは何か。以下その点について二三の事項を考察したい。

二 在米移民の一般的状況

在米日本移民たちの抑圧感一般に如何なる彼等の状況から発生するか。考え得ることとして次の諸点があげられる。

- 一、農園労働者乃至日傭人夫の地位。
- 二、生活程度の低さ。
- 三、人種の偏見による差別待遇。
- 四、白人労働者団体の排斥。
- 五、それと關聯的に政治的排日の空気。
- 六、最後に母国日本政府の棄民的、移民政策の貧困、殊に領事館の卑屈無

能。これらは総じて革命、天長節両事件に關聯する。殊に(一)―(三)は前者に、(四)―(五)は後者に。

明治の三十年代の日本移民の問題が、週刊平民新聞・直言・光・日刊平民新聞など社会主義系諸新聞にとり上げられた場合としては三種ある。即ち布哇移民・桑港中心の北米移民・メキシコ移民である。これらの諸新聞に見る限りでは一般的状況からいえばハワイ移民が比較的よく、北米移民がこれに次ぎ、メキシコ移民は最も悪い。北米移民については後述するので、先ずメキシコ及びハワイ移民について見る。週刊平民四三・四四号(明治三十七年九月四・一一兩日)には「メキシコ移民帰航問題」が取扱われ、五百名の鉾山労働者が東洋移民会社の手によつてメキシコに送られたが、七月十六日に到着後メキシコ側の詐欺的悪条件に堪えかねて、二十八日には四四八名が辛うじて帰国した。この中十余名は病氣となり一名は死亡した。帰国後は会社も交渉を受けつけず、新聞も政府も冷淡であつて、彼等は生活の途を見失つた。四四号は西川光次郎のこの問題に対する実情調査報告であり、次いで会社・新聞・政府の態度について次の如く云つている。「(三)移民会社の冷酷。屑屋が屑を買ふが如き考へにて移民を募集し、而て之を海外に売り出す移民会社の冷酷なるは不思議なることにあらざれども窮民に対して何等の救済をも為さざるのみか、横浜への上陸当日死去したる一移民の葬儀費すら支出せざりしと云ふ。(四)新聞紙の態度。吾人は先づ十万円(註、会社側損失額)と五百名の生命を同じ重きと見るに不平なると共に、貧者と富者の争の場合に、徒らに公平を粧ふことは事実には富者に味方して貧者を打つものなりとの感なくんばならず。(五)政府の態度。五百の生命に關する問題なれども人を殺すことを嗜む今の政府にとつては五百の生命位は一考だも値せずと見ゆ。」そして最後に結論として、「移民会社の移民地撰定調査の粗漏なるも、移民に対して冷酷なるも、新聞紙の彼等の不幸に対してノンキな議論をなすも、亦政府が彼等の不幸に対して黙々たるも、畢竟世に『移民は捨民なり』てふ思想の勢力ある為なれば、此思想の排除せらるるまでは決して真正の意味に於ての移民なるものはざるべし」と云つている。事実この棄民思想はこの時代の移民についての根本問題たることを疑を容れない。同種の事

件は日刊平民六号四十年一月二十四日にも「メキシコ移民の逃亡」と見え、熊本移民会社メキシコ出張所河野広躰及び東洋移民会社代理人齋藤千之により、新着の移民の四分の三が逃亡してアメリカに入った事が報せられている。ただこの場合は前回に異り、三十九年十二月中に公使館書記が炭坑を視察し、その報告に基き荒川公使が移民の米国行きを自由を厳達し、その結果としての逃亡と見られる点がある。平民新聞はこれに關して、「公使館が逃亡を懲慥したりとは信じ難けれども、従来メキシコ移民が労働の苦痛に堪え兼ね合衆国の楽土を慕ふて逃亡するもの断へざりしは世人の知る所なり云々」という。日刊平民六八号四十年四月六日の分にも「メキシコの日本労働者」と題して、メキシコ中央鉄道建設のための日本人労働者一、四〇〇名の大部分が逃亡、残り二五〇名と報じている。

次にハワイ移民について見ると、週刊平民三号（三十六年十一月二十九日）には月刊雑誌「布哇」第四号より、移民の言葉として次の一節を引用しているのが注目される。「予等は愛國を呼号して郷國を辞したるに非ざりき。予等は忠君を標幟して異邦に来れるにては非ざりき。額の汗に由りて鉄の如く強き腕に由りて、予等は獨立して生活せんと欲せるが故に此処に移れるなり。予等の脚は深く異邦の土に固着せり。予等は此土にて妻を迎へ此土にて家をなし、子孫を設けぬ。此土の人民我等の力を讃ふ。日本の勢力は此に地盤を造りき。愛國を標幟せざりしと雖も今や予等は日本膨脹軍の名譽ある兵士なりと称えられつつあり。予等は日本を忘れず、然し國家の力を借らで独力信ずる所をなさん」

この感慨には当時のハワイ移民の複雑な心理を見るべきである。平民新聞はこれに次いで「彼等は会社（カ）の冷淡なる眼に見送られ若しくは冷淡なる見送をさへ与へられずして千里に向いつつある」といい、しかもそれらのハワイ移民労働者たちの本国への送金が、三十五年度中五百廿四万円に達していることを報じている。当時ハワイに於ける労働力の不足は大きく、新紀元六号（三十九年四月十日）によれば、ハワイにては労働力不足のため日本人労働者の賃金月十五弗から十九弗に上り、賃金引下げのためハワイの資本家は米本国に対し中国人労働者入国許可、西洋人、印度人労働者招聘に奔走し

て成らず、日本政府に移民増加の運動中なりと伝えられている。「布哇の移民新計画」そうした中でハワイ日本人は三十八年五月廿七日から三十日間、二千八百名の農業労働者のストライキを行い、悪質監督者の排除、賃金値上げ、薪炭飲料水の増給を要求し、警察官及び軍隊と戦いながら終に耕主ハツクフィールド会社から自己の要求を勝ち取っている。(直言二十号、三十八年六月十八日)しかしハワイ移民にも北米の高賃銀を懼れる気持は強く、ハワイから米本土への転住者が絶えなかつた。殊に甘蔗刈入期にはそれが甚しく、このことが四十年の学童問題から四十一年の日米紳士協定をひきおこす原因となつた事は後述する。

さて最後に北米太平洋岸邦人移民については、その人口八万、(日刊平民、四十九号「桑港日本人協会の訴」)九万、(直言廿号「社会主義者の見たる日本」)十万、(光廿五号「米國テキサスより」)等と数えられ、アメリカ國勢調査、日本領事館、日本人会調査による統計人口数は四〇年八九、五七三、四一年一〇三、六八三である。(日米文化交渉史、五移住篇九三頁)そしてまた「十五万エイカーの土地を耕作して年々五千万に上る收得あり」といわれる。(日刊平民四十九号同上)勿論それは太平洋岸にある農耕民や、テキサス地方における米作農民などの比較的 success せる場合である。当時米國在住者の中社会主義者であり且つ最も学識あり、平民新聞への寄稿者であつた金子喜一の報告によれば、彼等移民中文字ある程度のもは「百に對する八・九」、三十三年度移民の中「手に職ある者」千七百九十三人に對し「手に職なきもの」六千五十五人とされ、職能の分化と特殊技能の要求甚しい北米に於ては、「手に職なき者」の多いことが最も不利な条件となることを云つて、単に中等移民―普通教育程度の移民―ではなく、職能移民養成の必要を強調しているのは適切であつた。(週間平民二号、三十六年十一月二十二日金子「移民問題―職業移民」)

而してこの最も不利な条件の移民、即ち中等の教育あり、しかも特殊技能なき青年たちが如何なる状態にあつたかは、「光」廿一号(三十九年九月十五日)に引用された新公論所載井上啓次郎の「米國に来る勿れ」がよくその一端を伝えて

いる。曰く「青年が所謂煽動家の口車に乗せられて青春燃ゆるが如き大望に馳られ、やふやく渡米の目的を達したとせよ、彼等の結果は如何」、「奴隸根性の養成となる、輕薄根性の実行となる、酒と女と賭博の三者に近づく。遂にアメゴロとなりて滞米十年囊中一弗を余さざるの無頼漢となる。」更に「活動の日本」からの引用文「米国における日本学生の状態」によれば、太平洋岸サンフランシスコ・オークランド・サクラメント・ポートルランド・シャトルのみで、「破落付いて居る日本の学生」は八千人、その九分九厘までが「見るも嘔吐の出るような」惨怛たる墮落の状況にあるといわれる。革命事件が日本に報ぜられた時、この事件がこれら一部の無頼青年の仕業であると伝えられたのに対し、幸徳秋水は彼等が「米国にありて熱心に主義を伝道せる有為の青年にして多くは高等学校其他諸学校の生徒にして無頼の書生に非ず」と、諸新聞の「無責任なる漫罵を戒め」てはいるが、それら青年の現実の生活は、「心なき人」の眼には所謂アメゴロとも眺められたであろう事は察せられる。即ち「米国ニ於ケル日本革明党ノ状況」などによつて社会革命党員の職業を検出して見ると、植山治太郎は日本人日傭人夫宿泊所経営及び周旋業、竹内鉄五郎はコック、岩佐作太郎はスクールボーイ、日傭人夫、小成田恒郎はコック、小川金治は家内労働者、幸徳幸衛は日傭人夫である。そしてこれら職種労働者の境遇の悲惨なことについては、秋水自身も渡米中の論説「日本移民と米国」に於て、「太平洋岸にある米国子女は以爲らく、日本人は米国子女のためにスクールボーイ若しくはハウスウォークを爲す人種なりと、；若し我同胞諸公にして其衣食金銭のために馳らるるなくんば、誰か外国子女のために日々皿を洗ひ窓を拭ふを喜ぶものあらんや、誰が四千哩の異域にお三権助となつて叱咤され頭使さるるに甘んずる者あらんや」と、この状態を日本国家の政治的・経済的組織の欠陥として憤り、且つその移民の生活を「寂寞也、蔭鬱也、殺伐也、残忍也」、「責任の念薄くして放縱に陥り易く」、「在米日本人の性情日に戕残せられ、品格の日に汚下し行く」ことを認めざるを得なかつた。〔在米邦人は幸福なりや〕革命・天長節両事件の如きもこの移民の一般の状況、殊にこの在米青年の状況に温床を有つていた事は想像に難くない。これら一

般の状況がそのまま個人的無自覚の中に停滞すれば、それは正に「嘔吐を催す」デカダンスに留るだけであろう。しかしこのような彼等が何らかの形で結合し、一つの自覚へ導かれるとするならば、それは如何なる方向へであろうか。殊にこれら青年たちの団結を指導したものが、河上清であり、片山潜であり、安部磯雄であり、幸徳秋水である時、彼等のゆべき方向は自ら規定され、その自己表出は激越化せざるを得なかつたのである。

三 在米日本社会主義団体の成立

既に明治三十年片山潜はキングスレー館事業の中で「渡米案内」の著によつて知られ、渡米した青年の中には片山の思想に触れている者があり、また三十六年週刊平民新聞創立と同時に渡米し、非戦論を以つてアメリカ社会主義者間に活躍した彼の思想に感激した青年も多かつたと思われる。社会主義者沿革にも社会革命党員の中片山の影響を受けたもののある事が指摘されている。しかしそれら主義者青年の結社は比較的遅く、その最初のものは、三十七年三月六日の週間平民十七号に片山の米国通信中、「河上清氏はシャトル社会党組織のため尽力され、吾人は茲に始めて天下晴れて正々堂々『日本社会党』の誕生を見る事を得たり」と報告されているものである。党員は河上清・今城光徳・尾崎善城・中西周尚・大沢音吉・清水三郎・中島勝次外一名の八名とされる。

このシャトル日本社会党とほぼ同時に成立したのが「桑港社会主義協会」であり、週刊平民五十一号（三十七年十月三十日）に「今春」と見える。これは片山の渡米を機として「二三人の同志相集まり」結成したもので、その微力「俗人の嗤笑を買ふのみ」と報告してはいるが、当地における平民新聞及平民文庫の仲介宣伝を申出ている。その会員名は不明であるが、恐らくこの協会を中核として集合したのが、三十八年一月廿一日桑港及びオー克蘭ド在留邦人社会主義者の新年小会であつて、（直言四号）会合者十一名が自己紹介を行つてゐるから殆んど最初の会合と思われる。そのメンバー中後

の社会革命党员となる者が見られる。即ち会合者は市川藤一・倉持善三郎・岩佐作太郎・大沢信卿・丸岡重光・西条了・塩沢義男・山崎今朝弥・竹内余次郎・岡繁樹・赤羽一である。このメンバーは二月十一日にも再び会合して、その際に桑港とオークランドの社会主義者の聯合が正式に決定され、演説と会計報告があり、幹事を市川から岩佐に引きついでいるので、会の体裁もほぼ整つて来ていると思われる。(直言八号、三十八年三月二十六日)かくて彼等は三月以降主義の宣伝に乗出し、三月中二回、四月中一回の演説会を開き、四月廿六日には安部磯雄を囲んでの茶話会が持たれ、席上討論を行つてゐる。この時の会合者中には新しく、中沢・鷺谷・小村・菅沼・田宮・山田の同志名が見える。更に四月三十日はメーデー前夜祭で、独・仏・猶・芬の諸国人に加わつて、岩佐が日本人を代表して演説している。(直言十七号、三十八年五月二十八日「北米桑港より、岩佐作太郎」)

このサンフランシスコ・オークランド日本人社会主義協会ともいふべき彼等の行動は、以後秋水の渡米まで報告がない。この間五月廿日には前述のハワイ邦人のストライキがあり、その中心に革新同盟会の活躍が報ぜられ、日本政府に対する移民保護の要求三ヶ条が提出されているが、これが社会主義団体か否かは明かでない。(直言二十号)又直言三十号によると「北米フレソノ社会主義研究会」の成立が報ぜられて居り、「新世界」新聞社のフレソノ支社竹内、「日米」新聞の宮野の二人が市中有志を糾合して社会主義研究会を開いたとあるが、これも必しも主義信奉者の集りではなく、主義の是非を研究する性質のものようである。また「光」一号(三十八年十一月二十日)に金子喜一の報告として、岡繁樹が桑港 Hayes ストリート六八〇番に「平民社」を起し、社会主義に関する日本の新聞雑誌書籍類の取次ぎ、渡米者の便宜をはかるなどの事業を始めたことあり、「此平民社は将来必ず桑港における日本人社会主義運動の中心となる事と思はれます」と云つてゐる。当時の報告の遅れから考へて、この平民社の設立は九・十月の頃かと思われる。従つてこの前後邦人社会主義者の運動の中心となつた場所は、在留邦人の先駆者と称せられる安孫子久太郎の福音会・仏教青年会・岡の平民

社、それと少し後の事になるがパークレーの植山治太郎経営の「レッドハウス」・オークランドの土曜会集会所などであった。

以上のような在米邦人の社会主義者の運動に一つの大きな結節点を与え、その活動を劃期的に熾烈化したのが秋水の渡米であった。彼は三十八年十一月二十九日シャトル着、ここで「多少の社会主義者若くは社会主義研究者を見出した」といつている（光五号、「シャトル市より」）のは前述シャトル日本社会党のメンバーの事であろう。桑港に彼を出迎えた人々の中には岡・岩佐・市川・中沢・倉持など十余名の同志があつた。（光五号、桑港より(一)）十二月六日、平民社に同志集合して、ここで毎日曜日集會が決定。七日には無政府主義者ジョンソンの家に無神論者キッター、ロシア革命黨員フリッジ夫人と共に秋水・岡夫妻・加藤・西沢・西条・渡辺が集會、（光同上）九日桑港社会党員 Eitel の來訪、十日桑港社会党オルガナイザー、ジョージウィリアムスの來訪あり、秋水も桑港社会党に入黨した。（光）五号、桑港より(二)）この秋水の桑港社会党との關聯が媒介となつて邦人社会主義者と米人社会党との交渉が密接になつた事が考えられる。十四日は Eitel 方の社会党小集會、十五日には I. W. W. からの集會出席方の依頼がある。十六日は「ジョージウィリアムス以下白人数十名に交つてのゴールデンゲートホテルでの演説會」。岩佐作太郎の開會の辭、桑港社会党 C. H. King の演説につづいて秋水の演説。「戦後に於ける日本国民の墮落と窮民の状を述べて、普通選挙と社会主義の実行の急を訴へた。（「光」六号、桑港より(三)）

明くれば三十九年。一月六日のオークランド在米邦人有志演説會も「加州白人社会党本部會堂」を借り、植山が司會し、「ソシアリストヴォイス」記者マクラヴィットの「万国労働者提携」の演説と秋水の「社会主義の要領」についての演説があつた。彼はオークランドの主義者について「オークランドの日本人中には新智識ある学生が多いので、社会主義は案外拡まつてをるやうです。将来此と桑港兩處の同志が聯合して働けば大いに勢力を得て來ることと信じます」といつ

ている。(「光」七号、桑港より四)王・桑両地の聯合は既に決議されながらその實際に於ては未だしの感があつたのかも知れない。七日は平民社での小集會。十四日の福音會での研究会は予ねて決定されていた定例研究会(月二回)の第一回で、出席者は倉持・岩佐・市川・西条・長谷川。この会の主旨は「当地日本人間同志の伝道は、先づ定則の討論研究会より始むること」にあり、秋水がこの會合に他日東亜日本人間の社会主義思想勃興の原動力たらんことを期待していることが注目される。(「光」八号、桑港より五)秋水はここでは彼等に社会主義の原則論を打ち込まうとして居り、いわば公式論的なその思考の型は「革命」などに明らかに見られるのである。

かうして秋水を中心に結集されてゆく在米邦人社会主義者の周辺に、注目されるいくつかの事柄が明確になつてゆく。その第一は移民問題で、これに関しては前述移民の一般状況の中にも触れたが、尚、その激化した形での排日問題については後述する。第二は彼等の無神論者、唯物論者、ロシア革命党員との接触、というよりも、ロシア革命の影響の点である。殊に一月廿一日オークランドにおける赤い日曜日紀念會の感銘などは大きな作用を彼等に与えたと考えられる。これは万国労働者同盟の後援の下に行われ、「世界工業労働組合代表」アンソニー、オリブジョンソン夫人、米国社会党アウステンリスに交つて秋水が演説した。その感激が彼に思想的变化を与えた事はこの前後の「桑港より」や「一波万波」に見える所で、彼が革命的潮流を以つて必然的な世界的思潮と確信するに至つたのもこの紀念日を機とする。この感動は同時に在米邦人社会主義者のものであつたともいえよう。彼等がやがて自らの党を「社会革命党」と名づけ、その機關紙に「革命」と命名し、その手段として「暗殺主義」を標榜するに至つたことの周辺として、以上の点は見逃せない。第三は彼等の思想傾向である。二月十一日福音會会室における第二回研究会について、秋水は青年達が価格問題・倫理問題・宗教問題を好んで討論することを云い、「彼等の多数は歴史的唯物論から割出した科学的社會主義者、即マルクス派の人々である」といつている。この唯物論については前掲二侯の佐々城宛書状の中にも、彼等の暴力主義がつまりは環境

の致す所という革命黨員たちの考え方が示されていたが、またこの唯物論が忠君愛国の否定、天皇の權威否認となつてゐることは彼等の所論の骨子ともいふべく、四十年一月二十四日の御真影事件に關して書かれた「時事評論―忠君愛国の犠牲」、**「革命」**第一号「乱雲飛雲」、第三号「兵士諸君に与ふ」、「ミカド」ニ対スル日本人ノ迷信」、そして四十年十一月三日の天長節事件をひきおこした「我徒は暗殺主義の実行を主張す」の檄文に至るまで皆同一論調である。即ち人類は猿類の進化せるものとの立場から人類平等を主張し、国王・資本家の収奪を攻撃し、戦争による殺戮行為を否定する。この種の思想は日本に於ても四十年頃には森近運平などによつて説かれてゐるもので、秋水にもこの思想は既にあつたと思はれるが、彼自身渡米以前には露骨な表現は見られない。それ故在米日本人のこの唯物論は秋水の影響というよりも彼等自体米國に於て獲得したものと見るべきで、「革明党ノ状況」や「社会主義者沿革」によればこの唯物論は「パークレーの米人ジャックロンドン」の影響とされている。ロンドンに元來親日家であつたが、来日中日本官憲の虐待によつて極端な排日家となり、桑港一帯の排日感情を煽つた人物とされる。渡米前既に枯川と共に「共產党宣言」を翻譯し正統マルキストを称した秋水が、この在米主義者にマルキシズムを見出して喜んだのは当然として、以上の如き在米日本青年の思考が果して科学的社会主義の名に価するか否かは問題があり、青年達の思想傾向が当時の秋水の考へてゐるようなものであつたか否かについても、いささか疑問がある。といふのは、秋水は入獄中アナーキズムに目覚め、米國帰朝後にアナーキズムの立場を明らかにしたが、在米中はまだその模索中であり、まだマルキスト的なのが尾を引いてゐると考えられ、それに対して在米社会主義者達の間には学問的な意味でのマルクス主義はともかく、その環境から既に無政府主義的急進的感情が濃かつたと思われ、この点神崎清氏の「革命伝説天皇暗殺の巻」に引用された岩佐の「在米運動史」中、岩佐と秋水の初対面の時の討論で岩佐の方が無政府主義を理想とする立場から秋水の社会主義を批判してゐるのは興味が深い。

而して以上のような秋水の思想の変化を示す傍証として、また在米邦人社会主義者たちの周辺の第四点としても、米國

の社会党との交渉の問題を考える必要がある。前述の如く秋水の渡米以来、その国際的集会において、主として秋水に接近したのは米国社会党である。当時米国における社会主義党派としては、「社会党」、「社会民主党」、「公共党」、「社会労働党」があつた。直言二十八号（三十八年八月十三日）「日本人排斥と社会主義」によれば、三十七年オランダに於ける万国社会党大会にアメリカ社会党委員提出の「東洋移民排斥」（否決）の件に対する斯波貞吉の抗議に対し、社会労働党機関紙デイリー・ピール主宰デリオンの弁明が紹介されている。それによれば排日決議案は「社会党」、「社会民主党」、「公共党」の提議であり、「社会労働党」としては「此の如き非社会主義的の決議案に同意すべきに非ず」と之を拒絶したのである。前三派と社会労働党の排日問題に対する態度の差は四十年の学童事件に於て明白になる。しかるに秋水が入党したのは前者であり後者即ち社会労働党を認識しはじめるのは、三十九年二月十九日、該党本部訪問以後の事である。秋水はこの訪問に際して日本人排斥に関する党の同情的態度を確認し、且つ伝道方法について大道演説の示唆を受けている。「光」十号の「桑港より(六)」及び「光」十一号の「桑港より(七)」には秋水のこの米国の社会党の二派の対立的差別への認識が明確に説かれるに至り、社会党労働党の「革命的労働組合」主義への傾倒が見られる。そしてこの新しい認識によつて「一波万波」の論調も高められ、彼の移民問題に関する二つの論説、「日本移民と米国」、「在米同胞は幸福なりや」が書かれ、それらが相関的に「国家に対する革命」を叫ばせるに至つてゐる。

以上の如き関係から秋水の中にアナルコ・サンデカリズムが熟した結果が彼の帰国に際しての、六月一日オークランドにおける社会革命党の結成となつた事は想像に難くない。その宣言及び綱領は秋水の筆に成つた。黨員名簿は「革命党ノ状況」、「社会主義者沿革」に見え、総数五十二名を数えるが、その中本部委員は、岩佐・小成田（恒郎）・竹内（鉄五郎）・倉持・幸徳（幸衛）・小川金二・大和久伊太郎・小川亀太郎・長谷川市松・二俣・佐々城・藤崎・延岡・植山の十四名であつた。

四 社会革命党の行動

秋水帰国後、社会革命党員たちは直ちに行動を始めた。それは秋水によつて計画されながら果されなかつた大道演説による主義宣伝である。六月十日オークランド・フランクリン街に赤旗を樹て、彼等は群衆によびかけた。長谷川が開会の辞をのべ、西条が英語で社会革命党を宣言し、「我等は肌膚の色彩を論ぜずして、団結して労働者階級の前に資本家を戦慄せしめよ」と叫び、その直後警官に拉致された。竹内鉄五郎も「万国の労働者諸君覚醒せよ」と叫んで捕えられた。この二人はその後の交渉で即日釈放され、十三日には裁判所に於ても公訴却下となつて、彼等は大道演説の許可をも得ているから、この事件は無許可の路傍演説のため生じたものであろう。捕えられた二人の釈放には米国社会党のタークの力添えが有力であつた。（「光」十八号三十九年八月五日）米国社会党は社会主義宣伝に関する限り彼等の味方であるが、排日問題に関しては彼等の敵となつた。この点が革命事件、天長節事件の一つの周辺として注目すべき点であると思われ。この「光」の項の終りに「来る十七日」に再び路傍伝道を行う予告が見え、更に「光」十七号に「昨夜例により」云々とあり、この種の伝道は機会ある毎に続行されていると見てよい。またこの十七号には社会革命党の「太平洋海員同盟のストライキ」に対する支援の状況が詳細である。それは六月二十日前後の事であり、在米日本人の労働問題にも関聯していた。このストは海員同盟が船主同盟の横暴に対して起したもので、船主側は海員同盟の要求を蹴り、却つて東洋人労働者を募集して白人船員を苦しめようとし、日本・中国の労働者でこれに雇われるものもあらわれた。社会革命党はこの火事場泥棒的行為を「労働者道徳を蹂躪」するものとして、海員同盟に支援の申入れをすると共に、日本人労働者に対しては二度に亘つて就労拒否を行なうよう警告を發した。「若し夫れ諸君が過つてその罪悪（火事場泥棒的就労をいふ）を犯すあらんか、之れ我が同胞の一大禍根也。彼等は諸君を以つて仇敵となすのみならず、万国の労働者は我が同胞を以つて

労働者の反逆人種となさん。斯くの如くんば諸君は目前の一小利のために永遠に名誉と福利を失墜するもの、豈戒めざらんや云々」

六月廿二日、彼等はオークランド仏教青年会に於て演説会を開いた。司会は長谷川、西条・竹内・宮田の演説が行われた。（「光」二十号）二十九日には白人の同志とのピクニックでの交歓、この報告の最後に「吾党は今不幸にして一の建物を有せず一の機関紙を有せずと雖も、同志諸君の奔走は遠からず機関紙を得るに至るべきを信ず」とあり、その実現が「革命」発行によつて見られる事になるのであるが、それに至るまでに既に彼等は小冊子や檄文の配布につとめている。

建物については、震災後家屋の払底、同志の離散などが関係あると思われる。桑港の平民社は震災にも無事であつたけれど、岡が秋水と帰国中であり、又一説には岡が党員から除名されたともいわれるような関係から平民社が使用できなかったであろう。そしてこれに代るものが植山のレッドハウスであり、この頃から紹介され初めている点から見て以後同志の集会所になつたものと思われる。

しかしこの様な彼等の努力の中に、一方米国における、殊にカリフォルニア州に於ける排日運動は次第に昂まりつゝあつた。日本人労働者は「ジャップ」、「スケベイ」の嘲罵の下にあり、四十年一年間における排日暴行事件の数は五十七件に及んだ。（日米文化交渉史、一二五頁）「日本人労働者の中には余りの迫害に憤激して北米に於ては日米戦争を主張しをる者さへ有之」と片山は報告している。この報告の載つた「光」二十五号は三十九年十月二十五日のもので、この十月にはいわゆる「学童事件」が発生していた。（後述）片山は排日運動の情勢を分析して日本人労働者の優勢、資金の点で白人に迫りつつあること、カルフォルニア、モンタナ、ユタ、アイダホ、コロラド、オレゴン、ワシントン各州にては「日本人なくば北米地主の産業は中止を免れず候」ともいつている。彼の觀察は少しく樂觀的であると思われるが、一面この日本人労働者の優勢に対しての白人労働者の抵抗が強まつて来ている事は事実で、従つて排日運動は経済上労働者の需給関

係、即ち労働力過剰や資本家側の邦人忌避から来るのではなく、米國労働組合の、日本人雇傭による自己賃金の低下に対する反対が大きく、更にその労組の上に立つ民主党、公共党などの政党関係からくる排日、更にそれに支持される「政治家が唱へ出したるものにして」、「北米紳士閥が東洋政策のため軍備拡張をなし、東洋人排斥に力める」関係から生じたとする片山の解釈は、それなりに正しく、これらの点は既に古く明治二十年以来の問題であつたのであり、更に後述学童問題に於て証明される。

社会革命党の活躍はこの空気の中で次第に激化した。八月二十三日の白人社会党本部での大演説会には、片山の「在米日本人と労働問題」について、岩佐は「忠君愛國主義の末路」と題して演説している。八月二十六日、アラメダ市青年会の席上の演題は倉持「唯一の途」、竹内「現社会と革命」、岩佐「恋について」、植山「労働者の自覚」であり、九月十四日オークランド、エボース同盟会の席上では、岩佐が「道徳観」、竹内が「爆裂弾」、倉持が「キリスト教と経済問題」を語っており、更に十月六日、サンフランシスコ仏教青年会演説会の席上、岩佐は「領事と所謂紳士」、倉持は「奴隷の道徳」、村上義太郎は「仏教と社会主義」、山内八重子は「文明は人道の敵なり」、植山は「罪惡論」、山内恒太郎は「メキシコ談」、小成田は「何故に社会主義を主張するや」について語っている。（「光」二十七号三十九年十一月十五日）これらの演説内容は知り得ないが、題目について見ても「忠君愛國主義の末路」といい、「現社会の革命」・「爆裂弾」といい、「奴隷の道徳」・「文明は人道の敵」といい、彼等の表現が次第に激化していることを語つて居り、それらが一号から三号に至る「革命」の内容に密接につながりを持ち、更に天長節事件の「暗殺主義」にまで激化し得る性格をもつていた事は容易に理解し得る所であろう。

従つていわゆる「革命事件」・「天長節事件」を上述の関係から切りはなして単にその文書の思想的矯激のみを強調することは無意味である。つまりこの二文書を上述の社会革命党の行動と關聯させて考える時、その思想表現の激化は別とし

て、その客観的評価はやはり前述領事側報告にあつた様に、彼等が特種な危険な企画を包蔵して之を實行しようとするものではなく、「其主義を広く世間に宣伝する」以上に出ないものと解すべきである。ただその思想表現の激化にはこの三十九年から四十年にかけての時点における特殊な問題がその周辺にあつて、それに刺戟されての事と見るべきである。そしてまたこの特殊な周辺の問題を考える場合にも革命事件と天長節事件とは同一に論ぜられない面のある事はいうまでもない。革命事件といつても問題になつた文書は一号から三号に亘る「革命」の極く一部にすぎず、その一部はこの三号に亘る「革命」の思想的基調から何等外れたものでない事を考えると、その周辺としては第一に秋水の思想の影響、秋水の「革命」への関聯の仕方、第二に三十九年十月に始まつた「学童問題」による排日運動への端初的反応の二点があり、天長節事件には、第一に四十年一月に生じた御真影事件、第二に日露戦争論功行賞、第三には四十年からはじまり四十一年二月に落着した敗北的な日米紳士協定、第四に日本国内における思想弾圧の激化殊に日本社会党の解散や赤旗事件などがあると考えられる。革命事件に対する秋水の関聯の仕方や、赤旗事件については既に述べた事があるので省略し、また御真影事件や日露戦争論功行賞の影響については「革明党ノ状況」や「社会主義者沿革」の指摘する所であつて、細説を要しないであらう。以下では両事件の周辺として三十九年から四十年にかけての排日問題についてその性格に注目したい。

五 所謂「学童問題」をめぐる排日運動

北米における排日運動は一八八二年の中国人移民禁止以後発生した。一八九八年（明治三十一年）加州議會に日本労働者排斥決議案が提出され、一九〇一年（三十四年）加州議會が日本移民の禁止を連邦議會に要求、以後一九一一年、ヘンリーウエップ法案可決の第一次排日、一九二〇年の第二次排日、一九二四年の第三次排日と悪化してゆく。革命・天長節

の両事件はこの第一次排日運動の、いわゆる日米紳士協定成立の過程の中に置かれている。在米日本移民の運命に上昇から下降へ方向転換を与えたこの第一次排日運動は第二、第三のものよりその衝動は大きかつたとも考え得られよう。

この第一次排日運動の一つの帰結たる日米紳士協定（明治四十一年）への口火を切つたのが所謂「学童問題」であつた。明治三十九年十月加州上院に提出された「印度人及蒙古人の児童は隔離教育す」という法案が、「印度・支那・朝鮮・日本・其他蒙古人の児童は之を隔離教育することを得べし」と修正されると、我国は在米青木大使から加州教育局に再度抗議したが拒否され、（三十九年十月二十五日東京朝日新聞桑港特電）、青木大使は加州大審院に対して之を訴訟として抗議し、翌年一月十九日大審院は「二月十一日迄に復学拒絶を取消すべし」と命令を発したにも拘らず（日刊平民三号、四十年一月二十日引用の東朝特電）本法案は二十三日上院可決となり、下院に回附された。（日刊平民、七号）

この学童問題はそれ自体が主目的ではなく排日運動の口実に過ぎぬ事は明かで、これを機として加州における露骨な排日行為が集中的に行われた。四十年一月二十三日ハワイからの日本転住者三百名及び日本契約移民四百名は、ワシントン命令の口実を以つて桑港上陸を拒否され、これは加州日本人協会の斡旋により即日解消はしたが、加州人民はこれを「法律違反」として非難し、（日刊平民・七、九号）更に加州議會には「米国市民たるを得ざる外国人の土地所有権及び一ヶ年以上の小作権不許可」との加州法改正案が提出されて委員会附託となり（四十年一月二十五日、東朝特電）民主党首ブライアンは桑港に赴いて排日を煽動して共和党に対して党勢を張ろうとした。（日刊平民十号）更に日韓人排斥協会（明治三十八年加州労働運動指導者により結成されたもの）は日本人排斥を州民投票で決定せんと運動した。（四十年一月二十八日東朝特電）この土地所有権の剝奪排日法案及び国民投票は第二次・第三次の排日運動で実現されたものであつて、これらこそこの学童問題の底に横たわる排日運動の真意であつた。

以上のような加州の動きに対し、ルーズヴェルトは一月三十日ワシントン官邸に加州選出の上院議員とこの問題を協議

し学童問題に関する加州上院の決議はこれを「牽制すべき訓電」を發したと伝えられ、一方加州選出の上院議員は桑港教育局長を招集した。(日刊平民十五号、四十年二月三日) ルーズヴェルトは加州の学童問題の要求を抑制する一方、日本政府との外交交渉によつてこの問題の基底にある移民問題に何等かの解決を見出そうとし、その外交上の点については「青木大使も満足の意を表した」と伝えられ、妥協が成立した。(同上)

しかし加州側はなお強硬の態度を保持して譲らず、当時のロンドン電報によれば、米紙には日米開戦説すら見られた由で株式界も動揺したという。(日刊平民十六号)クロニクル紙の如きが強硬であつた事は考え得られ、二月四日の桑港電報によれば、桑港市長シュミッツは大統領に招集され、加州労働組合を代表して調査書及び統計を携え、「日本学童隔離命令を撤回せんとする大統領及び其内閣の尽力に対し、極力反対すべし」と伝えられた。大統領は日本側との外交交渉円滑化のため、日本の態度の硬化を恐れ、加州側に学童問題の譲歩を求め、その代り「大統領は該条約の趣旨により、加州政府が希望する法律の制定を勧奨すべき旨」を加州代表に説いたので、加州代表側も一応これに同意し、二月十日にはこの問題の落着すら報ぜられた。(日刊平民二十三号)

しかし加州排日派はこれに反対であつた。大統領の意中の対日新協定案は加州排日派の欲する所と齟齬していた。加州代表者の手許には強硬態度を要求する激刺電報が千通以上に達し、十一日夕方まで大統領と加州代表の間には決定的合意が成立しなかつた。加州側は先ず「日本移民に関して何等かの約定を見るまでは学童問題を譲歩せず」と主張し、大統領は学童問題の譲歩なくしては日本移民問題に関する協議は無用として失望の色深く、市長シュミッツも板ばさみの形となつた。

当時大統領にはまだ排日法案の決意はなかつた。ただ当面の現実問題として、米本土に於ける有利な労働条件に惹かれるハワイ日本人労働者の米本土への移住が甚しく、このためハワイは労働力不足に悩み、加州では白人労働者の生活水準の

低下をはじめ雇傭関係の悪化や、四十年のアメリカ恐慌に伴なう労働問題の激化があつて、これを防止するための、ハワイやフィリッピンの日本人労働者の本土移住制限が大統領の新改定案の内容であつた。勿論これは日本側としての自主的移民制限の自粛が裏打ちされていたわけで、既にこの案について日本側と一応の妥結を見た大統領は終に意を決して十一日、「聯邦政府は現行移民条例を改定し、布哇及比律賓におけるアジア人労働者の移住を禁止することを条件として」学童問題を解決する方針を決定し、加州委員、兩院移民問題委員及び青木大使の間を奔走し、ほぼ異議なきを確めた上、十三日桑港市長を招集した。(日刊平民二十六号)そして十五日、「米国外又は米國領地内にては島領地若くは運河地帯行き以外の旅行免状を有する外国人は大統領之を排斥することを得」との改正案を兩院に提出、二月十七日にはこの案が二十五対四十五を以つて上院を通過した。(日刊平民二十九号)

しかしこれを機に加州の排日熱は益々昂まつた。桑港の新聞は市長の処置に反対し、加州排日党は「日本人排斥法案通過までは決して満足せず」といきまき、加州上院議員カミネツチは日本人隔離学校設置及び学区選定権を加州教育局に与うべき件を州議会上院に提議し、日本人排斥協会長は市長を強く非難した。

かくて移民法修正案は二月十八日下院をも十対十五で通過し、二十日大統領はこの改定条例に署名した。(日刊平民三十一、三十二号)学童問題はこれによつて落着の方途はついた。しかし加州に於てはそれが直ちに実行されたわけではない。二十四日頃には桑港市街鉄道に日本人専用の車輛を造れという差別的待遇の議も起つており加州上院には又もや日本人を対象とする「外国人不動産所有防止法案」が提出され、これは政党関係によつて成立しなかつたが(日刊平民、四十号)学童問題も未解決のまま放置されていた。そして三月九日加州上院は再び「日本人排斥の可否を明年十一月の総選挙において州民投票に決定する件」及び「十才以上の日本人児童を尋常科各学級に編入しない件」を議決し、また加州選出の国会議員及上院議員をして「アジア人排斥法案通過のため適当な手段を取らしむる件」、米国人の安寧のため「日本人の

帰化の許可に反対する件」をも通過した。(日刊平民四十六号、四十年三月十一日)ただこれらの加州案に対しては大統領から、それらが移民条例修正談判の進行に妨げありとして加州知事に訓電があり、下院に於ては、これを上程せぬ事に終つている。そして学童問題については三月十六日の桑港学務官会議に於て規則を改定して、「十六才未満の日本学童が公立学校に入学することを許可し、英語不十分なる児童に限り東洋学校に入らしめること」に決定した。

以上がいわゆる四十一年の日米紳士協定に至る米國側新移民法成立の過程である。この執拗な加州の排日的行為の中で在米日本移民たちが如何に迫害され動搖させられたかは日米文化交流などに詳細である。これに対して大統領の態度は日本国内に於ては感謝され、感謝状すら送られた由が「革命」第三号「未だ醒めざる手」に見えているが、以上の経過の中に事を真相を見せつけられた在米日本人にとつては、それ所ではなかつた。日刊平民新聞の報ずる所によつても、この問題の真相を他の面から伝えているものがある。その一つは日刊平民三十五号雜報欄「布哇移民の將來」に見られるもので、即ちハワイ自由移民の賃金一日一円五十銭、然るに甘蔗刈取期における米本土の日本人賃金は三元乃至三元五十銭で、このため本土に移住するもの多く、ハワイ雇主は労働者欠乏に苦しみ損害を受け、一方加州の白人労賃一日四円乃至四円五十銭のため、日本人の入込につれて白人労働者は解雇され、「加州の如きは殆んど外人を庄倒して日本人労働者を以つて満たされる」状態となる。ここから今回の学童問題も、実は「ハワイ雇主等が同盟」して煽動し、遂に航禁禁止の目的を達したものであり、加州人はむしろハワイ資本家のお先棒を担がせられたという見方である。日本人排斥や学童問題も既に加州では明治二十年代からの事であり、これが必しも全てではないにしても、当時としては特にハワイの労働力獲得のため、ハワイから日本政府へ運動のあつた事は前述の如くであるから、この見方も四十年前後の排日激化の一面の真相を伝えるものであろう。第二は加州労働組合の動きと政治家との結合である。日韓人排斥協会が労働組合の指導者により結成され、桑港市長レユニッツが社会党出身である点からもこの点は明かであるし、以上のような日本人の優勢に対し白人

労働者が之を排斥せんとするの自然ではあるが、更にこの四十年は大統領選挙を直前にひかえての政治的な動きの活発化があつて、そのため排日問題が利用された点も見逃せない。民主党々首が共和党に對抗するためにこの問題を煽動し、四十年三月初めの加州上院提出の前記三項の排日法案について、これが民主党提案であるため共和党がこれに反対しているのである。(日刊平民四十号) 事実この移民法改正は国会上下院通過二十五票対四十五票、下院では十票対十五票で可決されたもので、満場一致というには程遠いものである。加州事業家にとつて日本人労働者の存在は有利な条件なのであり、排日に屑からぬ者も相当数あつたと見るべきである。また日刊平民二十号の金子喜一のシカゴ便りによれば、米国社会主義者に対立があり、保守的議会議会政策主義の社会民主党の国家本位に対して社会労働党は国際的であると、排日問題に關しても「社会民主党の一派は頻りに米国労働者の鼻息をうかがい、労働組合に媚び、日本人排斥をやり居り候へども、社会労働党は日本人に加盟して演説会など聞きおり候」といつている。また「革命」三号「未だ醒めざる乎」にも、社会労働党とI・W・Wとアナーキズム団体のみが「万腔の同情を以つて吾等を遇しつゝあり」とある。この排日が一部政治家の策動なりとの見方は片山も早くから打出していたし、日刊平民七十四号の田添鉄二の論説にも、排日の一因として「労働者が政界の一大権力を有する上に、大統領改選期も目前に迫りつつある場合なれば、周囲の政党は日本人排斥を標して太平洋沿岸における多数労働者の歓心を迎ふるに勉めつつある」と、ルーズヴェルトの移民法改正も亦この情実によると見てゐる。

6、日本側の抗議と「革命」に於けるその表現

以上米国側の動きに対して在米邦人ハワイ移民及び日本本国の反応はどうであつたか。在米邦人が激昂し日米戦争を云々する者のあつた事は既述の通りである。不安の中に成行きを見守つていた彼等は、改正移民法が米国会両院に提示され

ると、桑港日本人協会は「之れ実に学童問題以上の大問題」として本国よりの援助を求める長文電報を寄せ、(日刊平民二十七号)また二月二十一日の桑港電報によれば在米邦人等の反対運動の動きも報せられた。これは桑港に催された日本人連合協議会主催在米日本人大会のことであろう。一方ハワイ日本人は二月十八日、約千人がホノルルに集まり改正反対の決議を行い、また米大統領に抗議電報を送った。三月十三日桑港日本人協会は長文の電報により帝国通信社に事情を訴えた中に、日本政府が米大統領の提案に同意する態度を非難し、「是れ八万の同胞が十数年の苦心経営によりて、今や十五万エーカーの土地を耕作し、毎年五千万以上の収得あり、且つ毎年倍増の勢を以つて発達しつつある在米同胞の事業を根底より破壊し、我が日本民族を第二の支那人たらしむるもの」と述べ、更に「排日党の中堅は桑港市長一派のみ、然るに市長は刑事被告人となり、彼等の不人望今や極点に達し、排日党の運命旦夕に逼れり。此際日本人禁止条約を結ばんとするは愚もまた極まれり」と「泣いて」同胞の援助を求めた。(日刊平民四十九号)同様の趣旨は十六日憲政本党にも打電せられ、政府の弱腰が訴えられた。(同、五十一号)

勿論日本国内においてもこの問題に対して激昂が見られた。日本社会党では幸徳秋水、堺利彦、西川光次郎が代表して、在米中の金子喜一を通して米国社会党本部に覚書を送り、これを米国社会党系新聞雑誌に掲げた。「同志よ、我等はカリフォルニアに於ける日本人労働者排斥が主として人種的偏見より来れることを信ず。故に日本社会党は米国の社会党が万国労働者の団結の精神に従つて、本問題に満足なる解決を与ふるに尽力せられんことを期待し、且つ米国社会党本部が該問題に対する意見を吾等に示されん事を望む」(日刊平民二十三号)

大隈重信は二月二十二日、ニューヨーク、サン新聞宛抗議の電報を送り、「国家としても民族としても白人同様の位置を有するに至る迄は如何なる障害とも争ふべき」決心を告げた。また国内には対米同志会が結成され、日向輝武・田川大吉郎・松田順平・副島八十六・山本安夫・小川龜市・弓削田精一等が委員となり、二月廿五・六両日新富座に於て対米問

題大演説会、三月七日には六十名が会合して対米問題運動方針の決定が行われている。(日刊平民四十四号)

しかしすべては徒勞に終つた。日本政府は最初一応の抗議を行つたのちは全く無為無策であつた。従来、政府の移民対策が「棄民的」なものであり、事毎に「見て見ぬふり」をして来た。本事件についても国内輿論は抑圧するに努めたのであつて、米大統領がこの条約修正に当り日本政府の過大な要求を恐れたのは杞憂に過ぎなかつた。平民新聞七十四号の田添鉄二の「寒心すべき外交事実」こそ当時の日本政府の真相といふべきものであらう。「ひるがへつて日本官憲の行動に注目せよ、少くとも十余万の同胞労働者の生命に関する大問題なるにも拘らず、其外交は全然無為無能を表はしている。

否な日露戦争の惨禍のために多大の苦痛を感じつつある場合なれば、米國勢力の威圧に對して全然盲従の徳を守らねばならぬハメになつて居る。右の如く日米兩國は不自然極まる折衝を経て平和を弥縫し來つた。弥縫は眞の平和を保証するものではない。決して國際平和などいふ事については元來毛頭の信仰心も有しない我権力階級の外交としては、日本人排斥をもつて必ず兩國が眞劍對抗する場合にまで進行せしむるであらう。然り日米の外交にして現状のままに推移せんか、其論旨の結果として日米戦争は必ず到着するであらう。弾丸は遂に太平洋上に爆発するであらう云々」

今やこの排日問題の推移の中に在米日本人、殊に自覚せる社会主義者にとつて、米國資本家の政治的策略が暴露された。またこの資本階級に本來的に對抗すべき労働者階級の國家的エゴイズム、特にドイツ流パリアメンタリズムの社会民主党一派の裏切りも明白になつた。就中かのシュミッツ―秋水をして渡米中マルクス主義、パリアメンタリズムからアナーキズムに転ぜしめた一因をなしたとされている人物が、市長であり、労働者代表であり社会党出身議員でありながら汚職による刑事被告人であり、しかもそれが排日運動の中心人物である事は、在米日本人社会主義者をして、パリアメンタリズムへの不信即ちアナーキズムへの確信を倍加させたといつても過言ではない。更に亦、この問題に関する日本政府・日本國家権力の無能により見棄て去られた在米同胞の絶望の中に、彼等の憤りが如何なる形を取つてゆくかも想

像に難くない。「革命」はこのような排日運動のさ中に三号に亘つて出版されたのである。それは第一号三十九年十二月、第二号、四十年二月、第三号四十年三月である。この中で排日問題が如何に取扱われているかは注目に価するが、この革命の内容は今のところ「米國ニ於ケル日本革命党ノ狀況」に見られる抄録の部分についてしか知り得ない。しかしそれでも第一号「乱雲飛雲」に「日本政府の迷愚。米國加州日本人排斥の問題起るや、國民努力の掠奪機関たる政府は、其小使たる領事・大使・宗教家・教育家を唆かして正義呼ばわりや人道呼ばわりをなさしむ。何たる白痴ぞ、掠奪階級の存する限り迎も排斥の聲は絶へざるべし。日本政府たるものモ一少し考へ直しては如何。唯革命主義あるのみ、排斥を嫌ふもの、Jap, Sukebei の侮辱を好まざるものは奮起一番、各國の主權は勿論、貴族富豪其他紳士閥に属するあらゆる者及び其階級の保護者応援者たる學者・宗教家・軍人・官吏を滅亡せよ」とあり、彼等のアナキズムが排日問題によつて激化しているのを見る。革命事件として注目された「ミカド・王・大統領」の顛覆というのも右の一文と同じ事の表現であつて、この一句のみが問題にされるのは見当りがいである。亦第三号に於ても「未だ醒めざるか」(「革命党ノ狀況」に引用なし。原本による)にもルースベルトの移民法修正に対して「一等國の日本政治家は黙して声なく英聖文武なる日本皇帝は恰かも知らざるかの如し」と皮肉つているのである。「革命」三号を通じて移民排斥問題が周辺として彼等を刺戟した事は考えてよい。

最後に天長節事件を惹き起した「暗殺主義」文書の内容は「革命」三号の所論の集約的表現であつて兩者異質のものではない。「ミカド・王・大統領顛覆」には手段を選ばずといったその手段が「暗殺主義」と表明されたのである。ただこの「ミカド・王・大統領」という資本家の代表一般が「暗殺主義」では睦仁個人に限定されたところに問題があるが、「睦仁」の名は既に四十年一月末の御眞影事件抗議文書「忠君思想の犠牲」の中に用いられているものである。秋水の国外からの天皇批判の意図、マルキシズムの公式論的訓練は資本主義國家米國において抑圧された青年たちに急進的な傾向

を強め、ロシア革命の影響による世界革命の潮流への確信が排日問題を通じての故国に対する絶望感と表裏となり、更にこれに続く日本国内の社会主義に対する弾圧、日本社会党の解散、赤旗事件等によつて、国家権力否定の観念が絶頂に達して、遂に「暗殺主義」が出現したのである。それは国内における秋水一派のアナーキズムへの傾向とほぼ同一の傾向を辿つたものの、言論自由国アメリカにおける極端な表現と見るべきである。

**On the Causes of two lèse-majesté Affairs by
the Japanese Residents in America**

Yōtarō NISHIO

The “Revolution” affair, 1906, and the “open letter sent to the Emperor from the anarchists” affair, 1907, are affairs of special interest in the history of socialism in Japan. These affairs were chiefly reported in socialist newspapers in this country. Japanese people emigrated to America and Hawaii to escape from their straitened circumstances in their mother country. They were welcomed

by the capitalists there for their low wages, but they were also regarded as foes by the white workers. Their lives were always wretched and humiliating as compared with those of the white people. Japanese government seemed hardly concerned with their protection, and they thought they were abandoned by their mother country. The more intelligent of the emigrants formed socialist bodies to protect themselves, and San Francisco was the center of their movement. They demanded of the capitalists freedom and equality of the workers. The success of the Russian Revolution encouraged them. They blamed the Emperor as the representative of the Japanese capitalists. Japanese government was determined to rob the socialists of all their freedom. In 1906 the Legislature of California demanded of the President the exclusion of the Japanese emigrants. Their strong attitude moved the President and Japanese government yielded to the claim of the President. Japanese emigrants were placed in hopeless conditions since then. The two *lesè-majesté* affairs happened in this atmosphere. The Japanese socialists in America were politically helpless, but their despair drove them to resort to propaganda in most vehement terms. Japanese government was afraid of their propaganda, and determined to extirminate the socialists in the country.